



うるいの可能性

荒木さんの話では、遊佐のうるいは、1月から4月にかけて主に首都圏の市場に出荷され、品質的に高い評価を受けているとのこと。

栽培の面では、養成畑の管理は比較的手がからない。自分で増殖できるため種苗代が不要。冬にハウスで栽培できる。そのため、冬期間の収入源として重要な品目といえる。

ただ、株の掘り上げ、出荷、調整には労力を要するというたいへんな面もあるようだ。

うるいの促成栽培の仕組み

畑での作業（4月～11月）

株を植える

2年間 畑で養成

株を掘り上げる

休眠打破

うるいの栽培は、株を畑に植え、1年～2年養成して収穫する、という作業を繰り返す。

株は4月～5月に植える。養成期間は施肥、除草を適宜行う。

11月に入り、葉が黄色くなったら株を掘り上げる。掘り上げた株(写真右下)は、低温にあてる(休眠)。一定の期間寒さにあてると休眠から覚めて(休眠打破)、芽を出す準備が整う。



ビニールハウスでの作業（12月～4月）

促成ベッドに伏せこみ

収穫・出荷

電熱線を設置した温かい促成ベッドに株を伏せこむ。その上に、茎を白くするためのモミガラを入れる。

20日～30日で収穫となる。



『うるい』の栄養成分

山菜のなかでは、ビタミンCが多く含まれているのがうるいの特徴。少しあるぬめりのなかには、病気への抵抗力を高める効果があるという多糖類が多く含まれている。





ふゆの農業

最大積雪深が5mを超えるところもある山形の冬、12月から1月の平均気温は3 から0 前後の寒さ。夏期に比べて懐も寒くなりがちな農村・農家の冬、ハウスを活用した農家のくらしを取材した。



ハウスを活用した

『うるい』の促成栽培

遊佐町小野曾(おのそ)は、秋田県との県境鳥海山のふもとにある。

平成15年から農業に携わるようになった荒木さんは、父が始めたうるいの栽培を引継ぎ、農地を切り開いて栽培面積を増やしてきた。

うるい栽培農家の中では若手の荒木さん、現在100aの株養成畑を管理し、毎年その半分を伏せこんで、うるいを収穫、出荷している。



うるい栽培農家 荒木崇さん

[写真上]
2年養成のうるい畑

[写真下]
モミガラを入れた
促成ベッド